

菩薩地に於ける根本眞理の追求

川 田 熊 太 郎

一 序論

今茲での菩薩地とは文獻的には瑜伽師地論菩薩地を主とするもの。故に瑜伽部の諸論はその同類であり、十地經はその佳品の典據である。従つて内容的には此の菩薩地は十地經の十の菩薩地であり、瑜伽師地論菩薩地の菩薩の十二住である。此の十地と十二住とを對比するに後者が前者よりも廣く、第三極歡喜住が第一歡喜地に該當する。しかし勿論此の住と地との考へ方が矛盾するのではなくて、住の方が遺餘無く菩薩に關する一切の事なども收攝する事を期してゐるのである。『菩薩地』地品の七地は之を暫く問題外に置く。此の『菩薩地』によりて菩薩行の四種が言はれる、波羅蜜多行と菩提分法行と神通行と成熟有情行との。しかし後の三は初の一の異なる見地から見られたものであるか又は其の特種な部分である。故に菩薩行は波羅蜜多行に歸著する。而して此の波羅蜜多行の十が言はれる。此の十行に就きて見るに、それは十波羅蜜多を順次に行ずる事である。然るに此の十波羅蜜多の本體は初の六波羅蜜多であつて、後の四は此の初の六に其の補完として收攝せられる（その收攝の仕方に就きては異説があるけれども）。故に菩薩の一切行は尅實すれば六波羅蜜多に收攝せられる事と成る。然るにまた此の六波羅蜜多が三學に配當せられ（其の仕方には異説があるが）、此の三

學が一切の菩薩の學道を攝してゐる。それ故に菩薩行は、之を其の精要に就いて見れば、三學たる六度であり、六度なる三學である事となる。

斯くの如くであるから、佛教の根本眞理を我々が學的に追求する道に種々のものが有りうるであらうが、菩薩地に於ける菩薩行を考察する事に存する道を探る者は此の十地と十二住と六波羅蜜多と三學との相互關係を手懸として考察を進めるならば、それによりて所期の目的を果し遂げる事ができるであらう。今茲での私は此の道を探る。

二 三慧の問題

さて然りとして當然に問題と成るのは般若波羅蜜多たる慧學である、といふのは般若こそは依りて以て眞理が觀照せられ證知せられるものであるから。此の般若波羅蜜多は、十地經によれば、第六現前地に於て修習せられるのであり、それは般若を以て十種の様相の緣起を順と逆とに觀察する事である。瑜伽師地論菩薩地（以下之を『論』といふ）は此の十地經を所依として第三乃至第十二住を説いてゐる。然るに『論』は現前地に該當する緣起相應増上慧住のみを以て般若の修習せらるる處とせず、之をその第三とし、難勝地に該當する諸諦相應増上慧住をその第二とし、焰慧地に該當する覺分相

應増上慧住をその第一とする。此の事は『論』が此の三を以て増上慧學としてゐるのであると解釋し得られよう。これは確かに問題を孕んでゐる、といふのは、これは『論』自身の他の處での所説とも亦他の諸論の所説とも明かに一致しない點を含んでゐるから。しかし若し各地に於ける修習の内容に注目すれば、『論』が第二離垢地を第四増上戒住とし、第三發光地を第五増上心住としてゐる事には相當の理由がある、勿論他面に於ては問題を伏藏してゐるが。同様に『論』が第四焰慧地を第六覺分相應増上慧住とし、第五難勝地を第七諸諦相應増上慧住とし、第六現前地を第八緣起相應増上慧住としてゐる事に十地經に照して相當の理由があると言はれねばならぬ、といふのは焰慧地も難勝地も現前地も此の三は共に特に慧と關係が深いのであるから。斯く考へるならば、十地經の第四第五第六地は正に慧を中心とするものであるが故に、『論』は之を増上慧住の第一第二第三として、三慧 *trayaḥ prajñā* と呼ぶのであると此の所説を肯定する事ができる。此處から我々は一步を進めて『論』は増上慧學を以て此の三慧より成るとするものであると解釋する事が許されるであらう。勿論、此の意味の慧學は、般若波羅蜜多のみと同一なりとせらるる場合の慧學に比して、確かに其の範圍が廣い。しかし其の廣さに相當の理由があるのである。而して此の事は此の三部分を有して全一なる慧學が其の各の部分に依りて何を爲すか、即ち此の慧學の三部分の機能を見るならば明かとなるべきである。

(一) 先づ『論』は「菩薩は(1)能觀の眞實と(2)所觀の眞實と(3)眞實に於ける無智又は有智に由る衆苦の流轉又は止息とを慧を以て觀察し、如實に了知する、故に増上慧住の三が有る」とする。(1)が焰

慧地たる覺分相應増上慧住、(2)が難勝地たる諸諦相應増上慧住、(3)が現前地たる緣起流轉止息相應増上慧住である。(二)覺分相應増上慧住に入れば、菩薩は智 *jñāna* を成熟する十種の法を得るのであり、また四聖諦を慧もて證知する (*prajñati*) が爲に「四念住を首とする三十七種の菩提分法を修す」のであるが、その「菩提分法は智の焰と成りて正しく法教のための慧を照明する」のである。故に此の住に該當する地が焰慧又は有焰 *arcismatī* と言はれる。斯くの如きが能觀の眞實 (*yena bodhisattvaḥ tattvaṃ paśyati*) と言はれるものである。故にそれは能觀の般若の研磨であり鍛練である。(三)次に諸諦相應増上慧住に於て菩薩は十の行相によりて四聖諦を如實に慧もて認識する (*prajñati*) のである。而して此の住に該當する地が「極難勝」*śūdrīyā* と言はれるのは「諸聖諦に於て決定せる智は極めて難可勝」であるからである。斯くの如くであるから、此の住の特質は、前の住が能觀の般若即ち主體的作用であるに比して、所觀の眞實 (*yat tattvaṃ paśyati*) 即ち客體的眞理である。(四)最後に緣起相應増上慧住に於て菩薩は、簡単に言へば、緣起を證知して緣起智を得るのであり、「最高の對象又は第一義に通達する」*paramārtha-kṣaṇā* のである。故に此の住の特質は前の住のそれと同様に客體的眞理に即ち所觀の眞實に於て見出される、といふのは、此の住を立てる見地よりすれば、それは所觀の眞實の無智又は有智であるが、しかしそれ故に所觀の眞實をめぐるのであるから。此の事はまた次の事からしても知られる、即ち此の住に該當する地が現前 *abhimukhī* と名づけられるのは「此の地に於て無著智の現前たる般若波羅蜜多住が現在前する」からであり、而して十地經によれば「一切法の本不生の現前を忍受するが般若

波羅蜜多である」。勿論、客體的真理と言へば、主體的作用たる般若を言はねばならぬ。故に是等の増上慧住の第二及び第三に於ても般若の高まりは有るが、しかし第一慧住と比較して特質を求めるならば、此の第二第三慧住のそれは客體的真理又は所觀の眞實であらねばならぬ。

若し果して以上の如くであるとすれば、『論』は明かに増上慧學を廣義に解して、その三部分を承認してゐると言はれ得る事となるであらう。勿論、これは般若波羅蜜多のみと同一と言はるる場合の狹義の慧學を排除する事とは反對に、増廣したものである。

三 所觀の眞實たる根本真理

さて私は菩薩地に於ける菩薩行によりて佛教の根本真理を考察しようとする。而して般若波羅蜜多と同一と言はれる慧學に着目し、而して慧學が『論』に於ては増廣せられて三部分を有する事を見た。而してその三分は能觀の眞實たる初的一部分と、所觀の眞實たる後の二部分とにまとめる事ができると考へたのである。故に菩薩地に於ける根本真理は能觀の眞實即ち般若と所觀の眞實即ち認識せらるる真理との兩側面から考察せらるべき事となつた。それ故に先づ、而して今茲では、所觀の眞實を追求して佛教の根本真理と言はるべきものを見出す事に努めよう。

佛教の眞理は素より二三に止らない。しかし以上の考察によりて『論』が特に眞理としてゐるのは四聖諦と縁起とである事が明かとなつた。故に是等に就いて考察しなければならぬ。轉法輪經以來「諦」或は「實」或は「眞」即ち *sacca, satya* と言はれてゐるのはカテクソケンには四聖諦である。長部の諸經に依るに此の四聖諦の覺者による宣說又は講説が「法教」*dhamma-desaṇā* と名づけ

られてゐる。これは後の入楞伽經が「説通」*desanā-naya* 即ち「教に由る導き」と言ふ所のものであらう。故に私は四聖諦の特質を、それが「教」たる事に見出され得ると思ふ。

相應部第十二編因緣相應の諸經や長部の『大本經』『大緣經』などに依るに覺者は縁起の般若による認識によりて成覺したるのみならず、また之を宣説し講説してもゐる。故に勿論之を教と言ふ事もできるが、しかし是れは四聖諦の教とは其の有り方に關して明かに異なる。後者は自と他との關係に於て有るのであるが、前者は自と法との關係に於て有るのである。而して覺者は成覺後間も無き時に之を人々に説くのは徒勞であるとかまで一度は考へたほどである。私は斯くの如き自内證の眞理、有るがままの眞理 *tatva* の有るがままの自覺悟 *svayamabhisambodhanata* が「宗」*siddhanta* と呼ばれるものであると思ふ。それは四悉檀のうちの第一義悉檀である。後の入楞伽經が「宗通」*siddhanta-naya* と言ふのは此の宗に由る導きである。故に私は縁起の特質を、それが「宗」たる事に見出され得ると思ふ。

若し右の如くに考へて良いとすれば、四聖諦と縁起と又は教と宗との二者は如何に關係してゐるか。獨覺者とは異なる正等覺者は彼の宗に就きて示教する。故に彼によりて宗教が成立する。彼を聽聞する者は彼の示教によりて宗に悟入する。故に之によりて教宗が成立する。故に宗と教と又は教と宗との間には(1)その實體の同一性と(2)現實態に於ける相互性との二命題が成立する、といふのは、(1)若し宗と教との實體的内容が異なる時には宗を示教する者は眞實を語る者ではなくて虚偽を語る者であらねばならず、(2)宗を持てる者なるが故に教を立て得るのであり、逆に教を學びたる者なるが故に宗

を悟り得るのであるから。この點は經論によりても證明せられうる。先づ實體の同一性に就いて見よう。相應部因緣相應の第二十七、四十三、四十四、六十五經などと諦相應の轉法輪經などを讀み比べる人は四聖諦と緣起との實體的同一性を覺知せずに居られぬであらう。次に相互性に就いて見よう。(i)『論』は緣起相應増上慧住は何かと問ひ、答へて言ふ「諸菩薩は諦に於て能く覺せる増上力の故に、無智に由るが故に苦及び因の起ることを簡擇し顯示し、有智に由るが故に苦及び因の滅することを簡擇し顯示するところの住なり」と。これは梵本と善く一致する。グナブヘドラ譯菩薩善戒經の右に該當する箇所曰く「共十二因緣行とは、若し四諦を觀れば、一切の苦が因緣に従りて生じ、因緣に従りて滅することを見るなり、是れを共十二因緣行と名づく」と。以て教の四聖諦から宗の緣起への悟入或は證入を知る事ができるであらう。(ii)龍樹は中論觀四諦品第四十偈を以て言ふ「緣起を觀る者は之を觀る、苦と集起と及び滅と道とをこそ」と。これは宗を觀る事によりて教を觀るのである。以上によりて二者の相互性は明白である。而して此の相互性は二者の實體的同一性を證明するものとも成るのである。

所觀の眞實が右の如くに四聖諦と緣起とであり、而して二者の間に右の教と宗との關係が有る限に於て、菩薩が菩薩地に於て追求する根本眞理は何であらうか。既に見たるが如く戒學を修する増上戒住と定學を修する増上心住とを前段階として第一増上慧住即ち慧學の第一部分に於ては覺分即ち菩提分法が修せられるのであるが、これは「諸諦を覺するが爲」satyāvahodāyaである。此の諦即ち眞理は明かに四聖諦である。此の四聖諦が問はれてゐる根本眞理なのであらうか。如何にも佛教に於て諦 sacca, satyaと言へば、そ

れはカテクソケーンには四聖諦である。しかし是れは教である。故に此の教が基づく所のものたる宗をこそ其の間はれてゐる根本眞理とせざるを得ないであらう。而して實際に『論』は眞實 tattvaであり、勝義 paramārthaであり而して宗 siddhāntaである所の緣起を根本眞理としてゐると言はねばならない。それは何故か。

先づ『論』の住品に就いて見るに、既に見たるが如く、慧學の第二部たる諸諦相應増上慧住から慧學の第三部分たる緣起相應増上慧住への上昇移行は四聖諦によりて緣起の認識が成熟するにあつた。

これが十種の法平等性と言はれるものである。十種とは、玄奘譯を梵本によりて讀んでみれば、一切法に於ける有なる勝義なる自性の無相平等性、言説と造作と影像との無相平等性、この相に由るが故に自然に不生の平等性、因からも亦不生の平等性の故に自然からと因からも皆な不生なる事の平等性、畢竟に本より寂なる事の平等性、現に有なる體事を能取する正智の諸の戲論を離れたる事の平等性、一切の取と捨と造作とを遠離せる事の平等性、此れが煩惱と衆苦と雜染とからの離繫によりて解脱せる事の平等性、分別所執の境界の自性の幻化等の如き平等性、無分別知の所行の自性の有と無との無二の平等性である。此の十種の法平等性は、『論』が明示してゐる如くに、十地經に基づく而して是れは教たる四聖諦の觀察によりて其の根柢であり宗である所の緣起の眞の認識の成立成熟に他ならないのである、といふのは此の十種は緣起の眞理そのものの種々なる表現に他ならぬのであるから。此の移行によりて入る第八住（現前地）に就いて『論』は緣起の正觀、緣起智、無著智の現前たる般若波羅蜜多住の現在前、これによる空無相無願の三三摩地の引發を説いてゐるが、此の事は『論』が言ふが如くに「勝義を善くす

る」paramāthaśālahに他ならぬ。緣起が勝義なのであつて、此の緣起たる勝義に菩薩は此の第八住に於て「如理に通達する」yonisāṃ pratividyatiのである。

次に『論』の慧品に就いて見るに、慧の十相のうちの第二相なる一切慧に三相があるうちの第一相は「能く所知に於ける眞實に隨覺し通達する慧」である。此の慧 prajñā は所知の眞實 tattva 又は眞諦 satya に向けられてゐる。此處では tattva と satya とは同義である。而して此の眞實又は眞諦即ち眞理が、緣起の眞理である事は此の箇所の文よりしても亦他の經論よりしても明白である。而して此の緣起の眞理が問はれてゐる菩薩地に於ける根本眞理である事は、菩薩の波羅蜜多が六であつて而して般若波羅蜜多が六波羅蜜多の終局である事、及び菩薩の學道 śisānāga が三學に盡さるのであつて而して般若波羅蜜多と同一なる慧學が三學の終局である事からも肯定せられ得よう、といふのは此の般若波羅蜜多たる慧學、慧學たる般若波羅蜜多より以外の處に於ては眞實又は眞諦即ち眞理は求められ得ないのであるから。

斯くて「眞實」が即ち眞理が眞理として問題となつて來た。故に我々は、最後に、『論』の眞實義品に就かざるを得ない。其處では諸法の眞實性 yā (dharmaṇāṃ) bhūtaḥ と諸法の一切性 yā dharmaṇāṃ sarvataḥ とが眞實の義であると先づ言はれる。前者は無分別智の對象、後者は後得世間清淨智の對象たるものであらう。故に今茲では前者が問題である。續いて眞實の四種が言はれる、世間に於て極成せる眞實と道理によりて極成せる眞實と煩惱障から淨なる智の所行 (gocara) たる眞實と所知障から淨なる智の所行たる眞實との。此のうち第三は聲聞の四聖諦に證入したる生無我の眞理であ

り、第四は諸菩薩諸佛の緣起の證入による法無我の眞理である。故に此の二は共に「諸法の眞實性」であつて無分別智の對象たる眞理であるが、しかし第四が特に問はれてゐる根本眞理であると言はれねばならぬ、といふのは是れこそが四聖諦の根柢として諸法の眞實性のうちの眞實性であるから。此の眞實性に就いて『論』は言ふ「諸菩薩諸佛世尊の法無我に入らんとする所の、また入り已りて善く淨なる所の、一切法の離言の自性に關する所の、假設と言説との自性に於て無分別であつて所知と平等平等である所の智の所行の境界である。これは最第一の眞如であり、上無く、所知の邊際を盡したる眞如である」と。而して此の眞實は「無二の所顯」atraya-prabhavīramであり、「二」とは有と非有とである。此の眞實は斯くの如く無二に由るが故に中道 madhyamā pratipat と名づけられ、二邊を遠離せるが故に無上と名づけられる。而して「佛世尊の智は此の眞實に於てし、己に善く清淨であるが、諸菩薩の智は此の眞實に於てするも、學道の所顯である」。それ故に此の眞實こそが菩薩地に於て追求せられる根本眞理である事、即ち菩薩地に於ける根本眞理である事が明白である、といふのは菩薩は彼の發菩提心以後は此の所知障淨智所行眞實に於てして己に善く清淨なる佛世尊の智たる大菩提を追求して彼の地を歩むのであり、その地は尅實すれば彼の學道たる六度即ち三學であり、而してその六度の即ち三學の終局段階に於て捉らへられるのが此の眞理であるからである。

以上によりて菩薩地に於ける根本眞理の何であるかが明かにせられた。それは教の宗であり、煩惱障淨智所行眞實の根柢たる所知障淨智所行眞實である所の緣起の法無我・無二所顯の眞實・離二邊の中道である。菩薩は菩薩地に於て此の眞理を追求するのである。梵

文大乘莊嚴經論の眞實品も人をして此の結論へ到らしめる、といふのは此の品は菩薩地なる眞理追求の努力の目的を第一偈にて顕出する、而してその目的が縁起である所の三自性の中道である事を明白ならしめてゐるからである。

四 結論

菩薩の十二住のうち第三極歡喜住より第十二最上成滿菩薩住に至る十住に關しては十地經を全面的に肯定し、之を所依とし、之を取意的に摘要し、また之を注釋的に敷衍してゐる所の瑜伽師地論菩薩地によりて考察するとき、菩薩が菩薩地に於て追求する根本眞理を右の如くに考へ言ふ事ができるとすれば、此の根本眞理が印度に於ける初期及び中期大乘の根幹を成してゐる事は明白である。後期大乘も之を根幹としてゐる事は大日經及び金剛頂經よりして論證せられうる事である。而してこれは單にインド大乘に就いてのみならず、また支那及び日本のそれに就いても確實に言はれうる事である。しかも是等は原始或は根本佛教に由來するのである。故に之によつて此の根本眞理の歴史的諸形態と此の歴史を作つて生きながら自己を展開する所の此の根本眞理の超歴史的體系とを探究すべしとの課題が生ずる。これは順次に而して漸次に解決せられなければならぬ。今茲では最後に此の根本眞理の比較哲學的特質に就いて一言述べておく事とする。

此の特質は種々の仕方で取出されうるであらうが、相應部因緣相應の第二十經に依るに、宗たる根本眞理の縁起は界 *dhatu* であり、法住 *dhammānāhata* であり、法決定性 *dhammaniyāmatā* であり、依之性 *īdappaccayatā* であつて、これは諸如來の興起と不興起とにかかはらずに立住し續けてゐるものである。これこそが法身であ

らう。如來は之を師とし之を覺證し現觀する。かくて宗を獲得したる彼が受用身又は報身である。彼はその宗を示教する。此の彼が應身又は化身である。故に菩薩が菩薩地によりて追求する根本眞理は淨法界として常住なるものであり、本住の法性 *pariśuddhatā dhammā* であり、報應の二身の如來が依りて世に出興する所のものである。故に此の根本眞理はヴェーダーンタのブラフマン又はアートマンでもない、アートマンと誤解せられかねない如來藏は實際には「如來の二無我の藏」なのであるから。また此の根本眞理は、質料主義と形相主義とより成るブユシズムたるギリシア哲學の或はヒュペル・ブユシズムたるキリスト教哲學の或は此の二者の習合たるパンセイズムの或はシナ哲學の根本眞理の孰れにも還元せられ得ないものである。

(右は文部省科學研究費による研究の一部である。)

- 1 十地品は之を簡明に言表してゐる、曰く、一切法無相故平等、無體故平等、無生故平等、無成故平等、本來清淨故平等、無戲論故平等、無取捨故平等、寂靜故平等、如幻如夢如影如響如水中月如鏡中像如燄如化故平等、有無不二故平等、と(天二の六十八右)。近藤校梵本九六頁を參照のこと。